

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	雑誌『台湾愛国婦人』における演芸速記について：講談『愛国婦人』における「新選組」「幕長戦争」表象を中心に
Author(s)	柳瀬, 善治
Citation	アジア社会文化研究, 21 : 1 - 27
Issue Date	2020-03-31
DOI	
Self DOI	10.15027/49055
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00049055
Right	
Relation	



論 説

雑誌『台湾愛国婦人』における演芸速記について —講談『愛国婦人』における「新選組」「幕長戦争」表象を中心に—

柳瀬 善治

はじめに 『台湾愛国婦人』について

『台湾愛国婦人』は愛国婦人会台湾支部の機関誌として明治 41 (1908) 年 10 月 22 日に創刊され、大正 5 (1916) 年 3 月 1 日発刊の 88 号で終結した雑誌であり最近では岩手県で新資料が発見された¹。本雑誌については下岡友加が持続的に研究を進めているが、以下雑誌の成り立ちについて下岡の研究論文に従って概略をまとめる²。愛国婦人会は戦死者の遺族・傷痍軍人の救護・慰問などを目的とした婦人団体であり、婦人活動家奥村五百子らが中心となり、明治 34 (1901) 年に皇族華族らの上流婦人を母体に結成された³。台湾での結成は明治 37 (1904) 年に台北・台中・台南に三支部が結成され、翌年にこれらを統合する形で台湾支部が結成された (台湾総督府内)⁴。『台湾愛国婦人』は創刊号が『台湾愛国婦人会支部報』として刊行され、第 2 号から『台湾愛国婦人』と名義を改め、月刊雑誌として前述の通り 88 号までが刊行された。第 2 号以降については前述の新資料発見を契機として三人社から復刻版の刊行が始まっており、現在明治期の第 2 期 (25 号 明治 43 年 12 月号) までが刊行されている⁵。

雑誌中に収められた文学作品についてはすでに高山実佐研究代表『『台湾愛国婦人』の研究——本文篇・研究篇』などいくつかの研究があるが⁶、同誌に定期的に掲載されていた落語講談などの演芸速記についてはいまだ検証がなされていない。本稿では雑誌の後期に連載された講談『愛国婦人』(大正 4 (1915) 年 1 - 12 月 口述者渡辺政徳) の「新選組」「幕長戦争」を中心に分析し、『台湾愛国婦人』というメディアの性質を考える糸口としたい。

1. 講談速記研究の問題点、『台湾愛国婦人』の演劇速記について

講談速記研究の先行研究に関しては、旭堂小南陵『明治期大阪の演芸速記本基礎研究』⁷、延廣真治「講談速記本ノート」⁸などの好著があるものの全体として手薄である。その資料精査や特定に関する困難さは中込重明「講談本の研究について」に述べられている。中込は講談速記本の入手が困難であることを述べ、講談速記本は公立図書館等での所蔵もされておらず、また題名呼称の不統一から本文特定などのテキストクリティークも難問であり、さらに書き講談（最初から書き物として作られているもの）と速記との区別などもはっきり弁別できないことなどの問題点を述べている⁹。もっとも困難なのは典拠の特定であり、延廣前掲論文では詳細な検証がなされているものの、典拠先が文献資料でない場合も想定されるため、その特定は極めて困難であると言える¹⁰。本稿でも典拠の特定につとめるが、後述の通り、それは意外な形で明らかとなる。

講談速記本に関する最近の研究としては、大橋崇行「『愛国』に覆われる世界 道徳教育としての『少年講談』」（『昭和文学研究』79 2019・9）がある。大橋は、「『講談』と『国民』『愛国』そして『教育』とをつなぐ言説が、すべて明治44年に編成されていること」「この年は『講談倶楽部』が創刊された年であるだけでなく、『立川文庫』が創刊された年でもあり」、「この年に、『通俗教育調査委員会』で行われた議論を経て、翌年に前掲の『少年世界』に初めて『少年講談』が掲載されることになった」ことを指摘し、社会的な変動と『愛国』の浮上という文脈に『講談速記』を位置づけることに成功している¹¹。本稿で述べる講談『愛国婦人』は明治44（1911）年以後のことであり、また明治44年には松平定信を扱った『白河楽翁公』が連載されており、こうした日本での言説編成と台湾での講談速記本の政治性が並行している可能性がある。

『台湾愛国婦人』の落語講談などの演芸速記については、口述者とされて
いる落語家はそのいずれもが実在しない落語家である可能性が高い。「二葉

亭友楽「三遊亭扇朝」は該当の落語家が『古今東西落語家事典』¹²⁾に見当たらず、おそらく架空の亭号を作って、既成の速記を流用したか、無名の速記者や落語家が勝手に名乗った可能性が高いと思われる。『軍記小僧』はいわゆる『真田小僧』であり、雑誌媒体の性質を考えて既成の作品に「愛国」「軍記」などの表題を与えて掲載しているケースが目立つ。また『講談 白河楽翁公』は口述が「蔡々斎柏葉」となっており、この講師は実在せず、実在の「蔡々斎桃葉（旧名 は落語家の三代目人情亭錦紅）」を基に作られた架空の芸名である。講談『愛国婦人』の口述者でもある「渡辺政徳」は雑誌『台湾愛国婦人』では「渡辺實」「蔡々斎柏葉」の名義を使い分けて講談を連載している。この人物については詳細不明であるが、以下に述べるいくつかの点で類推が可能となる。

『台湾愛国婦人』第8巻（明治42年7月）に「落語」として『玉の輿（妾馬）』が掲載（7号と9号には『忍耐』と題して『柳田格之進』が掲載）。口述は「蔡々斎柏葉」となっており、これは「蔡々斎桃葉」（元落語家でもある三代目人情亭錦江）をもじったと思われるペンネームである。そしてこの速記の速記者は「秋元格之助」とされており、この名前は名人として名高い三代目小金井芦州の本名である¹³⁾。三代目芦州は蔡々斎桃葉の弟子だったことがあり、そういった意味でもなんらかの関係があると推察できる。これらの点から、「渡辺政徳」は、芦州周辺の講談速記者・無名の小説家らの合作ではないかという推定が可能となる¹⁴⁾。

雑誌『台湾愛国婦人』に掲載された他の講談速記としては『講談 忍耐』（7、9巻）『細川越中守綱利公の仁』（12巻—15巻、17巻）『軍神廣瀬中佐の義心』（18巻）『女鉢の木』（19、21、22巻）『秀吉公』（23巻—27巻）『白河楽翁公』（30巻—42巻）『春日局』（50巻—68巻）『乃木大将閣下正伝』（51、52、54、56-59、61、63、64巻）がある。『講談 愛国婦人』は86巻で「渡辺政徳」の「死」（「遺稿」の文字がある）により中絶後87巻に2代目桃川如燕（実在の講師）講演の『虎徹の母』が掲載され、88巻の終号号では講談は掲載されていない¹⁵⁾。

2. 講談『愛国婦人』と先行作品、後続作品との関係

講談『愛国婦人』は前半では新選組（特に近藤勇・芹沢鴨とその周辺）、後半では幕長戦争を主題としている作品である。新選組を題材とした小説としては、子母澤寛のいわゆる「新選組三部作」がある¹⁶。子母澤作品への評価としては、林原純生が次のように述べている。

子母澤寛の新選組三部作とは、物語の方法的な自覚において、無名の庶民の語りを証言者として設定し、そして最終的に彼らは今証言者足りうるとして歴史という価値体系の実践的な参画者であるということを示唆するために、その方法的な自覚が細部の修辭的な配慮において構築され叙述されたものなのである¹⁷。

また、宮地正人は歴史研究の立場から、子母澤の記述戦略を以下のように評価している。

子母澤寛『新選組始末記』（一九二八年刊）は、本人もそう考えていたように、歴史を研究する目的であらわしたのではない。新選組にかかわる、数十年経って初めて語られる各種のエピソード（それもどこまで語り手の話の忠実な復元で、どこからか子母澤の主観的解釈なのか判然としない）をもとに、それ以前の硬直した尊王史観にしばられた否定的な新選組評価を解体し、昭和初年の普通の日本人にも、身近で、今隣りにいてもなんのおかしさ不自然さも感じさせない、イデオロギー性・思想性を全く欠如させた（というより、それを完全にカッコにくくった）、市井の卓越した劍客集団として再評価したところに、この本の歴史的意味がある¹⁸。

林原、宮地ともに、「新選組三部作」に対しては、子母澤が聞き書きをした人物の語りの正確な再現を目指したのではなく、当時の新選組をめぐる

イデオロギー的な解釈を「カッコにくくった」うえで、「細部の修辭的な配慮において構築され叙述された」意識的な歴史記述であるという評価を与えている。その「意識的になされた歴史記述」があたかも当時の市井の歴史の「声」の忠実な「再現」であるかのように受け取られ、またその後の大衆小説のひな型としていわば〈自明の型〉となっていたことが問題とされるべきであり、この点はいわゆる講談速記と大衆小説・時代小説との関連を考えたとき、あらためて論じられる必要がある¹⁹。

こうした子母澤の作品の歴史的意味から考え直した時、大正期に書かれた講談『愛国婦人』は、昭和期に入って子母澤寛が「新選組三部作」をまとめ、新選組への再評価が高まる以前の新選組表象の一端を表すものとして貴重なものであるとまずは言えるであろう。

だが、実はこの作品には「参照元」（つまり元ネタ）があるのであり、それは明治 35（1902）年に書かれた福地桜痴『女浪人』である²⁰。『女浪人』と講談『愛国婦人』を比較すると、プロット、設定、幾人かの登場人物の名前が完全に一致しており、ほぼ引き写しに近い箇所さえ存在する。文体は『女浪人』が擬古文体であるのに対し、現代文の講談話体へ書き換えてあり、『女浪人』をきわめて周到かつ狡猾に「参照」したのが講談『愛国婦人』であると言える。そのため、講談『愛国婦人』前半の内容分析は皮肉なことに元の設定を考えた福地桜痴『女浪人』研究と事実上同じ意味合いになる。なお、後半部分は別の資料を使って書き加えられたものであり、この点に講談『愛国婦人』記述戦略の独自性が認められる。

『女浪人』の先行論としては二つの研究がある。ひとつは越智治雄「福地桜痴試論」であり、越智はお信の造形に福地の自己心情の告白と内面の葛藤、名分論への批判を読んでいる。

お信は近藤との対決を通じて、名分が「見込の相違」にほかならぬことを把握し、その点ですでに近藤を越える。したがって、彰義隊士にも「忠義忠義と一図に思い詰めての貴君方の成され方がただいまの現状では却て不忠不義」とも言い得た。たしかにここに、桜痴がぐぐり抜けた

内面の葛藤が影を落としているのである。そしてさらに言えば、夫の遺志を受け継ぎながらも、倒幕の密勅のごとき策謀をついに許さぬお信には、桜痴の憤怒さえもこめられていたに違いない。こうしてようやく明らかになってくる桜痴の像は、比喩的に言えば転向者のそれであるかもしれない。ただ、彼が新政府のいかなる名分論をも信じなかったことも、たしかなのである²¹。

もうひとつは菅原健史「福地桜痴『女浪人』論—『主』を持たない者の革命」であり、これは『女浪人』を作品として本格的に分析した唯一の論である²²。菅原は「福地桜痴の思想遍歴に照らして『主』を持たない者の革命」を描いた文学作品として読み直す。「主」の名のもとに反復される暴力と報復の連鎖そのものを「敵」として、その連鎖を断つこと、「生涯『主』に縛られた政治人桜痴の限界を、小説家桜痴が創り出した『女浪人』が超越していく様を表現して」いることがこの作品の意義であるとする²³。

3. 講談『愛国婦人』と『女浪人』の設定の共有ならびに差異

ここからは、講談『愛国婦人』と『女浪人』の設定の共有と差異について確認していくこととする。講談『愛国婦人』の第1回では主人公の女性は「本所相生町二丁目」「上州甘楽 三河譜代」「松平家」の「慶子」「十八歳」とされるが、『女浪人』では「松井お信」という名前となっており、名前が違っただけで設定は講談『愛国婦人』と『女浪人』とは完全に一致する（というより完全に『女浪人』をトレースしたものであるということがわかる）。

この「上州甘楽」という場所は現在の群馬県甘楽町であり、江戸時代に織田家が治めていた土地柄である。この場所では江戸時代には明和事件（幕府による尊王論者弾圧事件 後述の山県大弐の存在もクローズアップされるこれにより織田家から松平家に代わる）が起こっており、幕末期には財政難により苦しんだ藩であるとされている。かつ木幡郡の下仁田は新選組の芹澤鴨が関わった天狗党の乱の舞台でもある²⁴。

これらの歴史的な文脈から考えて、敢えて福地がこの設定にした可能性が考えられる。つまり松井お信はもともと反幕府・勤皇論者の土地の出身者であるという設定が仕込まれているのだということである。

山県大弐が記した『柳山新論』は、市井三郎、野口武彦によって論じられているように、一種の「革命論」として読まれた江戸期におけるいわくつきの著作である²⁵。

いまここで見ておかなければならないことは、それが以後江戸時代の思想界でたまたかわされる湯武放伐、またそこから引き出される日本固有の政治制度をめぐる論争の、いわば原型になっているという事実であろう。観山が『柳山新論』の問題の焦点として、「両都向背の論」を持ち出してきた論理的直観はまことに正しかった。爾後さまざまなかたちでくりかえし取り上げられるこの争点は、やがて幕末になると、『講孟余話』をめぐる吉田松陰と山縣太華との論争のうちに、もっとも劇的な緊張をはらんだ局面を迎えることになる。両者の争点、というよりもはや対決点もまた、しだいに京都朝廷と江戸幕府との間の向背の有無にしぼられ、たがいに加熱しあう結果、「国体」の問題を論争の真正面に据えるにいたるだろう²⁶。

野口らも論じているように、この書物が遠く宇都宮黙霖を通じて吉田松陰に伝わったという説があり、この点のはちに触れる講談『愛国婦人』後半での幕長戦争（第一次戦争 禁門の変）のコンテクストを考えたとき重要となる²⁷。この幕長戦争の記述は福地の『女浪人』には存在しない加筆された部分であり、この加筆部分から、口述者である「渡辺政徳」が『女浪人』に拠った前半部分を別の政治的コンテクストによって読み替えるように誘導していることがわかる。また福地にも山県を論じた書物（『山県大弐』春陽堂 明治25（1892））があるため、ここで述べたような文脈は当然福地は知っていたことになる。

夫である「徳之丞」は（『女浪人』では「笹野辨之丞」）は三河譜代の名家

であり、「上総国夷隅郡」（現在の千葉県夷隅町）の出身であると設定されている、この大多喜藩は鳥羽伏見の戦いで幕府軍として戦い、敗退して幕府側から老中格からの降格を言い渡され、新政府側からは「朝敵」とみなされた土地である²⁸。つまり、ここは関東で数少ない「朝敵」藩であり、戊辰戦争における関東最後の拠点の一つでもある²⁹。

この二人の人物をめぐる設定から、松平慶子（松井お信）の出自が一見幕府側でありながら、①新政府から見た「朝敵」（いわゆる「一会桑」グループ）になることを暗示か（『女浪人』） ②あるいは山県大弐—吉田松陰—高杉晋作につながる系譜であるとしたなら尊王でありかつ長州閥（新政府）へ結びつくことになる（講談『愛国婦人』）。このように繊細に仕組まれた『女浪人』の設定を、おそらく「渡辺政徳」は熟知しつつ、別の政治的コンテキストへと誘導している。

3月14日に「徳之丞」は御茶ノ水堀端で左肩先を斬られ（これも『女浪人』と同じ）「新徴組一味か」と言い残し徳之丞は絶命する。この言葉が慶子（お信）の心に残り、「夫の敵を討ちたい」と考えるようになる。ここで講談『愛国婦人』は「新徴組」と書いており（所々で「新徴組」の誤字がある）「壬生浪士」とは書いていない。この単語の選択に講談『愛国婦人』の著者の判断が垣間見られ興味深いが、「新徴組」解釈の記述として、「是は新徴組の重立ちたる輩は新選組と成て上京致して居る故で御座い升」（このフレーズは『女浪人』を踏襲している）と書かれている。

元治元年に父が病の床に就き、慶子に江戸に戻るよう説得をする。その際の後見人は会津藩士である「手代木五郎兵衛」である（この設定も『女浪人』と同じ）。そして江戸に帰る慶子を若侍二人が後をつける。第4回で奥津の宿手前で侍の争いがおこる。ここで出てくるのは、「奥詰銃隊 梅原主水 岩見助六 藪阪吉内」（これも『女浪人』と全く同じ）の若侍であり 男装した慶子は「松平慶次郎」（『女浪人』では松川信次郎）と名乗っている。慶子のあとをつけてきた若侍は「桑名藩 勝田源造 小林良平」（『女浪人』では勝田新蔵 杉山半平）となっている。桑名藩に該当する人物は特定できなかったが³⁰、会津藩・桑名藩は、いわゆる一会桑グループ（一橋家・会津藩・桑名藩）であり、ここからも『愛国婦人』（『女浪人』）の設定に薩長閥（明治政府）と

は異なった政治的コンテクストが仕込まれていることがわかる。

この「手代木五郎兵衛」にはおそらくモデルがおり、会津藩士 手代木 勝任（てしろぎ かつとう）がモデルであると思われる。中西健治の研究によれば、手代木は新選組を指揮し、慶喜に使えたこともある人物で、坂本龍馬暗殺の黒幕という説もある³¹。「慶子」は「手代木五郎兵衛」のもとに身を寄せる。そこで「手代木」から夫である「徳之丞」を襲ったのは「新選組の芹沢鳴」である可能性をほのめかされ、芹沢が水戸天狗党の残党であることも作中で描かれる。この点は先に見た松平慶子（お信）の出身地（下仁田）が天狗党の乱の舞台であったことと合致し、福地はこうした文脈を知ったうえで『女浪人』を書いていたはずであり、講談『愛国婦人』はこの福地の設定をそのまますべて流用している³²。

4. 新選組への言及および『女浪人』との設定のズレ

ただ、新選組をめぐるのは、講談『愛国婦人』に『女浪人』には存在しない記述が書かれている。その一つがいわゆる「奉嘆願趣意書」をめぐる記述である。講談『愛国婦人』第4回では、会津藩宛ての嘆願書（「三月十日 徳之丞が芹沢に襲われたのと同時期）が語り手のこの場面への挿入という形で言及されている。その「奉嘆願趣意書」を以下に引用する。

奉嘆願趣意書

今般外夷切迫の儀ご付き世上混乱、恐れながら上京の上、天朝を奉御守護候は勿論並に大樹公御警衛を以て神州の穢れを清浄にせんが為御下向の後勅に基き攘夷仕り度同志一統の宿願に御座候然る処大樹公御下向無之に一統東帰可致旨仰せ付承知仕候、併し東帰の上直様斬夷致し候儀

に候おぼ大悦至極ご御座候へども、漫然と退去の儀は一統の不忍処に候、何卒大樹公御下向乞御警衛仕り度志願に候、恐れながら御城外夜廻り等の御警衛御命じ被下候おぼ難有仕合に御座候元より毛頭も私意無之、此迄の御享命心魂に徹し難有奉存候、只々託命報国の心願に候儀若し願意御聴届け不相叶おぼ、退身浪々致して

も天朝大樹公の御守護棟夷可仕決心に御座候、愚意の趣御取次被仰上度候仍て連名
を以て奉願上候以上

浪士 芹沢鳴 近藤勇 新見錦 粕谷新五郎 平山五郎 山南敬介 沖田総治 野
口健司 土方歳三 原田佐之助 平間十輔 藤堂平助 井上源三郎 永倉新八 齊藤
一 佐伯又三郎 阿比留鋭三郎

(講談『愛国婦人』 第4回 『台湾愛国婦人』77号 大正4年1月 p201
下線太字強調は現存の「志大略相認書」との相違部分)

「奉願趣意書」は、いわゆる「志大略相認書」(近藤勇の郷里の知人宛ての書簡)に収められた嘆願書である。隊員の序列が芹沢が筆頭で土方が9番目になっているなど現存の「志大略相認書」の文面と大略が一致する(ただ「沖田総司」が「沖田総治」となっている部分は他の箇所の表記が正しいことから誤記の可能性³³⁾がある。

この大正4年の段階では「志大略相認書」は活字として刊行されておらず、子母澤寛の参照資料の一つである西村兼文『新撰組始末記』にはこの書簡は含まれていない³⁴⁾。そして元ネタである福地『女浪人』にはこの手紙は含まれていない。つまり「渡辺政徳」が書簡の現物(現存しているものと同内容かそのヴァリエント)もしくはその写しを確認している可能性があり、これは、子母澤寛以前の新選組表象として興味深いと同時に、現存の資料体とは異なる言説の存在する可能性を示すものとして貴重である。子母澤寛の『新選組始末記』ではこの書簡の抜粋とともに17人説(『愛国婦人』と同じ)・20人説・25人説をあげて子母澤自身は永倉新八翁同志連名記などを典拠に浪士13人説をとっている。子母澤の17人説が「志大略相認書」を参照したうえで出されたものかどうかは不明である。その理由は子母澤が近藤らのイデオロギー性を「カッコにくくる」ためにあえて引用しなかった可能性も否定できないからである。なお、渋沢栄一『徳川慶喜公伝』(渋沢が福地の執筆を頼むが福地の死で実現しなかった)には第2巻の第10章に新選組結成の際の諸説(人数)が記載されている³⁵⁾。渋沢は台湾に工場を持つ大日本精糖、明治製糖の設立に関与しているが、後述する益田太郎冠者は台湾製糖の取締役で

あり、三井財閥の益田孝の子息である。

大阪北新地での芹沢らと力士との小競り合いの場面は、新選組研究史や小説などの新選組表象で必ずと言っていいほど取り上げられる有名な逸話だが、この逸話も『女浪人』には含まれていない。

講談『愛国婦人』第9回では、語り手＝演者が近藤勇の「故宅たる宮川氏の家を訪れ」「村の古老の其の当時の関係者などから聞取ました」と記している。この回、そして続く第10回では近藤の幼少期から近藤家に養子に行った後の来歴が詳しく語られている（この部分も『女浪人』には存在しない）。ここで語られる近藤の来歴が史実と一致するのでおそらく「渡辺政徳」（あるいはこの筆名を名乗ったメンバーの一人）は実際に宮川家を訪れ、周辺の取材をしたものと思われる³⁶。先に見た「志大略相認書」の宛名人の一人は「兄宮川音五郎」である。この取材の記述がもし事実であれば、講談『愛国婦人』は子母澤寛が『新選組始末記』を書く10年前に当時の関係者に取材して新選組についての作品を書いていることになる（なお、子母澤は近藤の兄の音五郎の次男近藤勇五郎の談話をとっている³⁷）。

5. 「日本国」の浮上、「植民地台湾」の文脈

講談『愛国婦人』第6回-第8回では手代木五郎兵衛が近藤勇と面会し、徳之丞の殺害は「笹川徳之丞と申す者を幕府の奸物とし天誅に行ひし」ことを知ることとなる。そして慶子は武芸修行の名目で近藤勇のもとに入門し、10月の上旬、慶子は嵐山で近藤と二人きりとなり、薙刀を構え、「亡夫の敵」と近藤に立ち向かう。近藤は驚きつつも、事の真相を慶子に述べる。この印象的な場面はこれもまた『女浪人』の完全な流用である。

この場面に興味深いのは、慶子と近藤の議論である。それは「なぜ徳之丞が不忠であると言えるのか」をめぐる意見の相違であり、近藤の言い分は〈徳之丞は徳川家に対して不忠をした〉というものであり、これに対する慶子の反論は〈徳之丞は日本国に対しては不忠はしていない〉というものである。

成程貴君が徳川家の御不為であると、一途に思召すのは御道理には存じ升が、併し徳之丞の思い立ちました處も日本の御為、日本の御為は取りも直さず徳川家の御為、御為と云ふ字に二つは無と心得升が夫れ供別で御座いませうか

(講談『愛国婦人』第8回『台湾愛国婦人』 『女浪人』にも同内容の記述あり)

ここで信子が述べる「日本」という概念の導入は、幕末という作品の時代背景を考えると超歴史的なもののように響き、国民国家が成立した後世からの逆算ではないかとも疑われる。この点に関し、当時(文久年間)の志士の抱えた政治的ジレンマとその解消法について、宮地正人は「国学的文脈」が援用されたとして以下のように説明している。

寺田屋事件で明白になったことは、全国的レベルで国事運動を展開しようとする際のサムライの忠誠対象と封建的主従関係の矛盾という問題であった³⁸。

有馬(寺田屋事件で死去した有馬新七 引用者注)は薩摩を含む日本六十余州の各々を国とし、そこでの大名・家臣間の封建的主従関係を「小君臣の義」、国初以来の天子と一人一人の日本人との関係を「大君臣の大義」と区別し関連させることによって、自己の主体性を確保しようとしている。また彼の論理の立て方は、松陰的な儒学からの演繹というよりは、国学的文脈からの論理展開である。薩摩の場合、長州と異なり、サムライの間に平田国学がかなり浸透していたが、その関連があるのかどうか、興味の引かれるところである³⁹。

こうした「国学的文脈」による処理は、先に見た慶子(お信)の背景(山縣大弐の出身地)を考えると決して想定できなくはなく、一見唐突に見える「日本国」の導入も理にかなった設定ではあるのである。

ただ、先に大橋論を参照して指摘した(明治44年の「講談速記」をめぐる

「愛国的」コンテクストの浮上)を念頭に置いて考えてみるとこの部分の解釈はより複雑になる。福地桜痴が『女浪人』を書いたのは明治35年であり、こうしたコンテクストの組み換えがおこる前である。また福地は明治新政府に批判的視座を持っていた思想家であり、こうした「愛国的」コンテクストを許容しえたとは思われない。福地が『女浪人』で設定した(山縣大弐をにらんだ)「国学的文脈」とそれに基づいた「日本国」という概念は、それを換骨奪胎した講談『愛国婦人』で元の福地の意図とは別の明治44年以後の「愛国的コンテクスト」に回収されてしまう結果となっているのである。

さらに、講談『愛国婦人』で加筆修正がなされたことによる新たな「植民地的」コンテクストの創出についても述べておきたい。長崎に渡った慶子に対面するのは五代才助(21回、25回)であり、この部分もまた『女浪人』の完全な流用であるのだが、『女浪人』で福地が五代を登場させた理由として、彼が明治14年の開拓使官有物払い下げ事件に関与し、それを福地が攻撃したという背景が想定できよう⁴⁰。無論、五代が幕末期に様々な重要人物に出会った存在として使い勝手がよかったこともあるだろう⁴¹。

ただ、講談『愛国婦人』の後半部分で幕長戦争と高杉晋作の逸話が付け加えられたため、五代才助の登場は別の意味を持ってしまっている。五代は文久2年上海滞在中の高杉に会い日本に帰ってから度も度々接触している⁴²。五代は明治8年の大久保木戸らの大阪会議の立役者の一人であり大阪商工会議所・大阪商船三井の設立に携わった人物でもあり、幕末の志士—新政府の官僚—実業界というコースを歩いた存在である⁴³。

五代はその意味で前述の渋沢栄一(渋沢は一橋家の幕臣)と並び称される人物なのであり、こうした固有名が大正時代の植民地の雑誌で機能する意味を考える必要があるだろう。益田太郎については後述するが、雑誌『台湾愛国婦人』は益田太郎とその父の増田孝が所属する三井グループと密接な関わりを持っている。雑誌『台湾愛国婦人』58号の「支部報」には「生蕃討伐隊」への慰問金についての記載があるが、それは「台湾糖業連合会」という台湾糖業会社のカルテル団体で会議が行われており⁴⁴、そこでの名簿に記載されている財界の幹部はほとんどが三井財閥の関係者である⁴⁵。こうした植民地経営をめぐる極めて生臭い文脈の中に置いたとき、五代友厚の名前は別の意

味合いを帯びることとなる。

6. 作品展開の相違—帰国する「お信」 帰国しない「慶子」—

イギリスへ逃れロンドンの社交界にデビューした慶子が東洋人を侮辱したスコットランドの大尉トルニングと決闘（30—33回）する場面は、先の慶子と近藤勇との対決の場面と並んで、この作品の中でもひとときわ鮮やかな印象を与えるものだが、先の近藤勇との対決場面と同様、この慶子のロンドンでの生活の逸話はほぼすべてそのまま『女浪人』を流用したものであり、決闘の日付まで一致（慶応2年10月27日）している。

『女浪人』では慶応3年に日本に帰国したお信が後藤象二郎、西郷隆盛や彰義隊の小田井蔵太と面談して戦争を避けるべきであるという自説を述べ、その後ロンドンに戻って物語が終わるが、『愛国婦人』では、慶子の帰国後の逸話は語られず高杉ら長州藩の視点から見た幕長戦争の逸話が語られそのまま未完となっている⁴⁶。

主人公の信について、「従来幕府の専制体制を改革して与論を採用し以て統一の政府を組織せんことを望み血を流さずして此政変を平和に成就し日本の幸福を進捗するを唯一の方針とする巾幗政治家」（引用者注 『女浪人』p183 外国奉行支配調訳の猿田の発話 立憲君主制と代議政体を理想とするお信にそれは今の日本では無理だと説得する文脈での発言である）という評語を、桜痴は与えている。しかし、こうした現実主義が容易にいれられぬことも彼に自明であり、「令嬢は政体改革の議論の為に幕府の役人には憎まれ、外国の事情を知て居る為に攘夷党には敵と目指され、又温和説を執る為に激烈派には害毒と認められ」（引用者注 『女浪人』 p 123 お信を上海経由で海外へ脱出させようとする英国領事の発話 講談『愛国婦人』でも第26回でそのまま流用）という言葉に至って、ほとんど彼は自分を語っていると言ってよいだろう⁴⁷。

むしろこの小説は、桜痴の「主」たる明治政府への、ひそやかな政治

的抵抗のメッセージとして読まれるべきである。彼自身は公に日露非戦論に加わることはしなかったが、開戦直前にこうした小説を新聞連載し、終戦直後に単行本として刊行したことの意義は問い直される必要がある⁴⁸。

越智の評価にあるように、『女浪人』のお信は立憲君主制と代議政体を理想とする理想に燃えた「演説＝議論する女」であり、またロンドンで薙刀で決闘をする「戦う女」でもある⁴⁹。この進歩性において突出したお信というキャラクターの魅力は『愛国婦人』では後半の議論の場面が描かれなことで相殺され、また菅原が述べる『女浪人』の日露戦争後に持っていた反戦＝政治的抵抗のメッセージも、幕長戦争に接続されることで意味を失う。

講談『愛国婦人』において、『女浪人』の世界観とは一致しないはずの長州閥の物語を接続することの意味は、先に述べたように『女浪人』が「一会桑グループ」（つまり明治維新の敗者）とイギリス流の立憲君主制・代議制の理念とを平和裡に接続するというテーマを持つ作品だったのに対し、講談『愛国婦人』はそのテーマを幕長戦争の逸話を使って濾過することを通じて維新後の体制を補完する「愛国物語」につなぎ合わせ、作品に込められた政治的理念を相殺し植民地肯定の文脈へと誘導することにあつたのである。

7. 幕長戦争の逸話の記述—文体の変化と史実との対応、そして大阪汎愛扶殖会—

幕長戦争の逸話の記述は『女浪人』には存在しないものであり、「渡辺政徳」（を名乗るグループの中の一人）が恐らくは取材し資料を収集したうえで加筆したものである。文体もそれまでの（つまり福地桜痴の文体をそのまま踏襲した）劇的な場面を活写する華麗なものから淡々と事実を記し登場する人名を列挙するものに変わり、それ以前とは異質の物語を接続したことをうかがわせる。この文体の変化に関しては、福地桜痴より「渡辺政徳」の小説技術が劣っていると見なすか、あるいは淡々と軍談の講談の話体を模したものとみなすかによって評価は分かれるが、いずれにしても明らかに異質の文体

によってこれ以降の作品は書かれており、その文体の変化の必然性が作中に見出せない以上、二つの異なる物語を接木したという判断をするほかないだろう。

史実との対応については、人名の読みや把握が間違っている箇所（たとえば奇兵隊結成の逸話は高杉晋作がすでに奇兵隊を離れている時期に山縣狂介と一緒にいたかのような記述になっている）がいくつか見られ、いくつかの逸話をアレンジしている箇所など脚色も目立つが（36席の逸話は安政年間・万延元年・文久3年の逸話がアレンジされている。また西郷隆盛、坂本龍馬、中岡慎太郎が一堂に会したという逸話は創作）、正確な資料や伝承を基にしていると思われる箇所（天王山ののちの京都失火の原因—会津藩・新選組による—については真相にたどり着いている）も散見され、この時代においてはかなり正確な情報に基づいて書いていたと思われる⁵⁰。

例えば、高杉晋作と長州戦争の記述に関しては、口述者「渡辺政徳」は実際に関係者に取材したことを記している。

演者曰す此お話しは高杉家に暫く居られし仁よりの直話で御座い升
(講談『愛国婦人』第37回 『台湾愛国婦人』82号 大正4年9月号 p150)

演者も或る日此人に御縁故の深い某家を問い升と、其主人公の申され升には廣田精一郎と云ふものは僕の家に住た者だ（中略）此短冊は廣田精一郎執中が自筆ぢやと仰せられましたから演者も手に執て拝見いたしました

(講談『愛国婦人』第39回 『台湾愛国婦人』82号 大正4年9月号 p156)

また、「俗論党」「正義派」の面々がすべて実名で記載されていることから、限りなく大正に近い時期に書かれた文献もしくは関係者の証言に基づいて書かれているのではないかと考えられる。明治22年の『維新資料』では俗論派の人物名は存命のものがいたことから伏字になり、大正10年の『防長回天史』では実名の記載になっているように、当時は存命中の関係者への配慮が

なされていたからである⁵¹。

この長州を取材した人物がはたして先の新選組の取材をした人物、そして速記者本人と同一の人物であったのかどうかは、その取材範囲の広さ・正確さと福地桜知の作品を下敷きにして講談風にリライトする技量とを同時に兼ね備えているとしなければならないことから疑問が残るところであり、先に述べた「渡辺政徳」とは複数の人物による合作のペンネームではないかという推察はここから成り立っている。

さらに興味深いのはこの記述である。

大阪汎愛扶殖会の慈善事業で彼の地方（山口県功山寺-引用者注）を巡り居りました時に古老の方より承りましたお話しで（みい升
（講談『愛国婦人』第43回『台湾愛国婦人』84号 大正4年11月号）

功山寺は高杉晋作らが俗論派を打倒するために「回天義挙」を起こした場所であるが、ここで留意すべきなのは「大阪汎愛扶殖会」という聞きなれない団体の名が唐突に出てくることである。

大阪汎愛扶殖会は明治29年に加島敏郎が活動を開始した慈善団体であり、大正期に「朝鮮扶殖農園」という朝鮮総督府の援助をもとにした団体で朝鮮半島への移民事業を行おうとしていたという記録が残っている⁵²。こうした団体に関与していたと自著で述べる人物が『台湾愛国婦人』という台湾総督府がバックにいる雑誌（後述）にも関与していたことは興味深い。明治42年6月現在の記録では山口県より二名の児童の収容の記録と出身児童のうち一名が台湾に滞在しているという記録がある⁵³。また加島自身の遺した日誌や記録により移民の対象国として台湾も検討されていたことがわかっている⁵⁴。

この団体は現在ではほとんど活動を記録した資料が残っておらず、実際に関与していない人間がこうした団体に関し具体的な発言をするとは考えにくい。そのため「渡辺政徳」を名乗るメンバーのうちの一人が実際にこの団体に関与していた可能性が高いと思われる。

そして、こうした慈善事業・養育院の一つの起源が松平定信（白河楽翁公）

なのである。東京養育院の設立者の一人である洪沢栄一はその資金の基礎が松平定信の「七分積金」であったことを知り松平定信研究を開始したことはよく知られているが、先に触れた『講談 白河楽翁公』には定信の「儉約」「慈悲」を讃えるエピソードが書かれており（『台湾愛国婦人』第39巻第20席）、この雑誌の「講談」作品に定信の「慈善」が焦点化されていたことが窺われる（なお、この『講談 白河楽翁公』の参照元＝元ネタは渡辺霞亭『白河楽翁 前後』至誠堂出版 明治42、43 碧瑠璃園署名である）。

また幕末の水戸出身者であり政治小説作家となり、その後慈善事業（感化院）へと歩みを進めた例として高瀬真卿（菊亭静）の存在も見逃せない⁵⁵。『台湾愛国婦人』27巻には「掬翠」署名の「東京感化院を訪ふ」という記事もあり、この雑誌が感化院活動と関わっていたことが窺われる。この感化院は高瀬真卿が設立したものであり、この記事の最後には高瀬の事と明治天皇皇后より「金員を下賜」されたことが記述されている⁵⁶。こうした幕末の政治小説家、著述家が感化院的なものを通じてナショナリズムの文脈に回収されていくという道筋は、『台湾愛国婦人』の「渡辺政徳」のような存在を考え併せた時、考慮すべき点であると思われる⁵⁷。

8. 『台湾愛国婦人』のイデオロギー的位置付け―益田太郎冠者『生蕃襲来』との比較を通して―

最後に、講談『愛国婦人』をとりまく当時の『台湾愛国婦人』の他作品とその背後に見え隠れする編集方針、そして雑誌のイデオロギーについて述べてとりあえずのまとめとしたい。講談『愛国婦人』（大正5）が掲載された当時は、台湾の「理蕃五箇年計画」（明治43―大正3）が行われた直後であり、雑誌『台湾愛国婦人』には毎号「討蕃集報」が掲載され、いわば総督府側と「台湾高地先住民」⁵⁸側の緊張状態を定期的に「報道」する媒体としての性質を持っていたともいえる。この「理蕃五箇年計画」前後には、台湾愛国婦人では戯曲作品が数多く掲載されており、後述の益田太郎、筆名益田太郎冠者の『生蕃襲来』（大正2）に加え、西岡英夫『生蕃御伽噺』（明治43、大正3―5）、渡辺政徳講談『愛国婦人』（大正5）が相次いで掲載されてい

た。これらは帝劇での演劇、お伽話の収集、講談という「口承文芸」によるプロパガンダであるといえ、これら一連の作品が政治的意図をもって企画・掲載された可能性を示している。西岡の作品については下岡友加が検討を行っており、下岡は「直接話法（会話）の多用」「語り手から読者への呼びかけ」といった特徴を指摘している⁵⁹。

益田太郎冠者『生蕃襲来』の背景を検証した先行論として乙重昌文の論文がある⁶⁰。乙重は『生蕃襲来』の上演時（大正2年5月 帝国劇場）に総督府が蜜柑の差し入れや写真の提供などを行いさまざまな形で支援していたことを当時の新聞記事を詳細に調査して明らかにしている。さらに山路勝彦の先行研究での指摘⁶¹を補強する形で益田太郎冠者の演劇が「明らかにタイヤル族の野蛮さを揶揄した作品であった」ことの間接的証明としてアミ族の「首祭」の踊りと若き日の川田晴久が「浜松市主催全国産業博覧会」の舞台上で共演していることを実証した⁶²。

その舞台で川田が演じていたのが『サロメ』のパロディであったことは重要であり⁶³、その理由は『サロメ』には言うまでもなく、<サロメが所望する預言者ヨカナーンの生首>が登場するからである。井村君江の研究によれば、大正時代には松井須磨子による上演をはじめ多くの『サロメ』劇が上演され、浅草ではサロメを大衆的に翻案する作品が次々と上演されたという⁶⁴。井村は『サロメ』の初めての上演が益田太郎冠者が重役を務める帝劇で初演されたものであることを指摘しており（大正2年12月 『生蕃襲来』の上演は大正2年5月）、そして何よりも益田太郎冠者自身が大正15年12月に雑誌『苦楽』に「狂恋のサロメ」という一文を寄せている⁶⁵。この作品の「首狩り」の風習の差別的な揶揄と見えるものは、実際には『サロメ』のパロディであり、また帝国劇場の重役でもあった益田太郎冠者による『サロメ』上演のための地ならし、および女性劇上演のための実験という意味合いがあったのである。

『台湾愛国婦人』の56号（大正2年7月号）には、この帝劇での『生蕃襲来』上演の際の主要配役（宗十郎、松助、幸四郎）と舞台写真（序幕と第2幕の計6枚）が解説付きで紹介されており、当時の上演形態の一端をしのぶことができる⁶⁶。

この作品の取材のため、大正2年に益田太郎冠者が台湾を訪問し（無論表向きの理由は彼が重役を務める台湾製糖工場の視察である）作中で言及されている角板山を訪れていたことは、『台湾日日新報』の大正2年2月の消息欄の記述により実証される⁶⁷が、なぜ、台湾製糖重役の重責にあった益田太郎冠者がタイヤルの居住地だった大嵙崁^{たいこかん}と角板山に入ることができたのか⁶⁸。

益田太郎冠者が訪れたときの台湾（大正2年＝1913年）はまだ「理蕃五箇年計画」（1910－1914）の最中でタイヤルの集落周辺は完全に安全な地域とはいいがたく、そのような場所に日本の財界の要人（しかも植民地経営企業の重役）が訪れることはリスクをはらんだ行為である（総督府のバックアップがなければ不可能であろう）。つまり益田太郎冠者のような人物がわざわざそうした地域に行った理由がある。

この点については中村平『植民暴力の記憶と日本人』第3章の「頭目」をめぐる歴史的経緯の記述がヒントとなる。中村によれば、タイヤルに「頭目」性が適応されていったのは1910年代であり、1897年から「蕃人」に「内地（日本）観光」が推奨されていて、1912年にはタイヤルのエヘン集落の「勢力者（頭目ではないことに注目）ワタン・アモイ」が選出され、1914年にはアモイには「頭目手当」が支給されている⁶⁹。

このようなきわめてデリケートな時期に益田太郎冠者は『生蕃襲来』の「生蕃」「アテヤイ」にわざわざ「生蕃頭目」と名付けているのである⁷⁰。これはこの作品があきらかな総督府のプロパガンダに加担していることを意味する⁷¹。こうした植民地統治への加担によって台湾製糖は「準国策会社」（久保文克）としての側面をあらわにするのであり⁷²、益田太郎冠者には陥落後の角板山及び「台湾高地先住民」を台湾製糖の新工場・サトウキビ畑を作るために動員できるという経営者としての計算も当然働いていただろう。

先に触れたように、雑誌『台湾愛国婦人』58号の「支部報」で「生蕃討伐隊」への慰問をめぐる会議が「台湾糖業連合会」という台湾糖業会社のカルテル団体において行われていたことがここで政治的な意味を帯びてくる⁷³。

台湾製糖は雑誌『台湾愛国婦人』の初期からのスポンサーであり広告を常時掲載しているが、「生蕃討伐」においても深く加担していたのであり、そこ

にさらに「劇作家」であり「帝国劇場重役」としての益田太郎冠者が政治的にかかわることで、『生蕃襲来』は成立したのである。

益田太郎冠者が『生蕃襲来』で行ったことをここでもう一度確認しておく。

- ①植民地統治の最前線であったタイヤルを籠絡・陥落させるためのプロパガンダ
- ②台湾製糖重役として、陥落後の角板山及び「台湾高地先住民」を台湾製糖の新工場・サトウキビ畑を作るために動員できるという計算
- ③帝国劇場重役として、ワイルドの『サロメ』を受容させるための地ならしとしての「生首」表象の大衆化及び女優劇啓蒙（サロメは女優がいないと上演不可能）
- ④喜劇作家として、植民地を舞台とした女優喜劇（および自身のイギリスでの戯曲見聞を生かすため）の実験

以上の4点に集約される。

益田太郎冠者は自身の日本社会での、そして植民地台湾でのポジションを熟知し、彼の文化資本を存分に使用したうえで「政治的に」振る舞い、『生蕃襲来』という紛れもないプロパガンダ作品を植民地の日本語媒体である『台湾愛国婦人』に掲載したのだといえよう⁷⁴。

そしてこうした作品を掲載しうる特質を持つ媒体に、朝鮮半島での植民地事業に関与した団体の構成員を含むと想定される「口述者 渡辺政徳」が、福地桜痴『女浪人』の政治思想を事実上の「改編」をして講談『愛国婦人』を連載し続けたことの意味を、現在改めて考えねばならないだろう。

それは、この雑誌が「理蕃五箇年計画」の時期に行っていた口承文芸を利用したプロパガンダに、「講談」の形式が活用されていたという事実であり、ここから明治大正期に「講談」をはじめとする口承文芸が小説や植民地の諸言説と複雑に接合されながら同時代の文化的・政治的コンテクストの中で機能していったのかを改めて再検証していく必要があるだろう。本稿はそのためのささやかな試みの一つである。

※本稿は、「『台湾愛国婦人』における演芸速記本について—講談『愛国婦人』における新選組表象を中心に— 日本近代文学会東海支部 第62回研究会（2018年12月16日）での口頭発表原稿に基づき、加筆修正したものである。発表の席上貴重なご意見を頂戴した皆様に御礼申し上げます。なお、本発表はJSPS 科研費JP17K02452「『台湾愛国婦人』の内容に関する多角的な研究」（研究代表者 下岡友加）の助成を受けた研究成果の一部である。

注

- 1『胆江日日新聞』2018年8月23日。
- 2下岡友加「雑誌『台湾愛国婦人』の性格—プロパガンダ、そして近代文学発生の場として—」（『県立広島大学人間文化学部紀要』5号 2010・2）。
- 3下岡前掲論 p121。なお、下岡の指摘にあるように（前掲論 p126）、愛国婦人会の会員はほとんどが本島人であり、これらの作品が台湾の雑誌購読者にどれだけ読まれていたかは疑問が残る。『台湾愛国婦人』の漢文欄についての検証がこれからの課題と言えようが、55号（大正2年6月）、56号（大正2年7月）の『台湾愛国婦人』漢文欄に鹿島桜巷の『八重潮』と題する作品の中国語訳が掲載されている。鹿島は60号（大正2年11月）に『国姓爺後日物語』と題する植民地プロパガンダ作品を掲載している少年小説作家であり、この作品は愛国婦人会台湾支部によって翌大正3年に単行本として刊行されており、その広告が63号（大正3年2月）に掲載されている。55号は後述の益田太郎冠者『生蕃襲来』が掲載されていた号でもあり、漢文欄と日文版との対応の検証を演劇や少年小説とのメディアミックスの問題を含め行う必要があるだろう。それは読者層とプロパガンダの成否の問題とも関係するはずである。
- 4下岡前掲論 p121。
- 5「愛国婦人会台湾支部機関誌『台湾愛国婦人』明治編」（第1回、第2回配本 2019・7、2019・12 三人社）。
- 6 高山実佐研究代表『『台湾愛国婦人』の研究——本文篇・研究篇』（国学院大学 2015）。同書に対する書評として柳瀬善治「書評 高山実佐研究代表『『台湾愛国婦人』の研究——本文篇・研究篇』（『日本文学』2015・11 p91-93）。
- 7旭堂小南陵『明治期大阪の演芸速記本基礎研究』（たる出版 1994）。
- 8延廣真治「講談速記本ノート」（『民族芸能』1981・7-1991・11 183-307）。

号 未定期)。

9中込重明「講談本の研究について」(『参考書誌研究』53号 2000年)。

10前掲延廣真治「講談速記本ノート」。

11大橋崇行「『愛国』に覆われる世界 道徳教育としての「少年講談」」(『昭和文学研究』79 2019・9 p52)。

12諸芸懇話会編『古今東西落語家事典』(平凡社 1989)。

13三代目芦州は、五代目古今亭志ん生が一時期弟子入りしたことで知られる。結城昌治『志ん生一代』(朝日新聞社 1977)。

14想定できる人物あるいは関係者としては谷口政徳(流鶯)かその周辺の人物が考えられる。谷口は明治20—30年代に偉人伝や少年修身書などを数多く出版した著述家であり大正期には著作が見当たらない(『明治文学書目』国立国会図書館所蔵の資料にも再版を覗いて大正年間の谷口の著作は見当たらない)。谷口は伊藤痴遊と明治30年に『明治太平記』を刊行しており、二分冊の後半が谷口流鶯(桃園舎鏡水名義)である。

15これらの作品と講談『愛国婦人』との関係については、「戦う女」・「演説＝議論する女」・「慈愛の女」—雑誌『台湾愛国婦人』収録の講談速記を読む—(日本近代文学会 2019年度秋季大会パネル発表 共同発表者 大橋崇行・日置孝之・神林尚子 2019・10・27 於新潟大学)で論じた。この研究については近日論文として投稿・刊行予定である。

16子母澤寛『新選組始末記』(初刊1928)『新選組異聞』(同1929)『新選組物語』(同1955)の三部作。

17林原純生「昭和初期の〈幕末〉物語—子母澤寛『新選組始末記』の周辺—」(『神戸大学文学部紀要 五十周年記念論集』2000 p464—465)。

18宮地正人『歴史のなかの新選組』(文庫増補版 岩波現代文庫 2017 p177—178)。

19前掲大橋「『愛国』に覆われる世界 道徳教育としての「少年講談」」(『昭和文学研究』79 2019・9)。また大橋「『実録』としての「西洋人情斬」—三遊亭円朝『名人鏡(錦の舞衣)』」日本近代文学会 2019年度秋季大会パネル発表配布資料。

20福地桜痴『女浪人』(「日出国新聞」明治35(1902)・3・16—7・16のち単行本化 明治38(1905)年)。この作品については、国立国会図書館デジタルアーカイブ所蔵の単行本マイクロフィルムを参照した。

21越智治雄「福地桜痴試論」(『近代文学成立期の研究』岩波書店 1984 p100)。

22菅原健史『明治の平和主義小説』(名古屋大学博士学位論文 第6章 2012・9・27)。

- ²³なお菅原論文によれば『女浪人』は歌舞伎化・映画化されている（歌舞伎は明治44年6月興行）とされるがこの点の資料については未見。
- ²⁴『群馬県史 通史編4 近世1』（1990）。
- ²⁵市井三郎「近世革新思想の系譜」（新NHK市民大学叢書3 1980）、野口武彦「湯武放伐のアポリアー近世後期儒学の『孟子』論争一」（『文学』1981・7 のち『王道と革命の間 日本思想と孟子問題』筑摩書房 1986）。
- ²⁶前掲野口書 p223-224。
- ²⁷前掲市井論文、野口論文、および飯塚重威『山県大弐正伝』（三井出版商会 1943）参照。
- ²⁸水谷憲二『戊辰戦争と「朝敵」藩』（八木書店 2011）。
- ²⁹小島茂男「幕末維新における譜代大多喜藩の動向」（『順天堂大学体育学部紀要』第10号 1967・12）。
- ³⁰前掲水谷憲二『戊辰戦争と「朝敵」藩』人物索引参照。
- ³¹中西健治「手代木勝任について 戊辰戦争後の幽囚時代を中心に」（『金城学院大学論集人文科学編』6(2) 2010）。
- ³²こうした緻密な設定がなされていたことを考えれば、柳田と越智の仕事以後ほとんど進んでいない福地桜痴の晩年の歴史小説について再検証の必要があると思われる。福地についてはジャーナリストとしての活動の検証が進展しているが、小説家としての福地についてもさらなる研究がなされるべきであろう。
- ³³日野市ふるさと博物館編『新選組のふるさと日野甲州道中日野宿と新選組』（新選組フェスタ in 日野実行委員会 2003）に掲載の写真での書状（日野市個人蔵）・翻刻と比較した。
- ³⁴西村兼文『新撰組始末記』（日本史籍協会編『維新之源・新撰組始末記其他』東京大学出版会 1974 日本史籍協会叢書 別編 30 野史台維新史料叢書）。
- ³⁵渋沢栄一『徳川慶喜公伝』（龍門社 1918）。
- ³⁶近藤勇が新選組研究史であまり重視されてこなかった点については前掲宮地正人『歴史のなかの新選組』（文庫増補版 2017 岩波現代文庫）。
- ³⁷子母澤寛『新選組始末記』（中公文庫 1996）。
- ³⁸宮地正人『幕末維新変革史』上（岩波書店 2012 p290-291）。
- ³⁹宮地前掲『幕末維新変革史』p290-291。
- ⁴⁰五代は薩摩の人間で薩英戦争に参加し、開国論を唱えた人物である（柳田泉『福地桜痴』吉川弘文館 1965）。
- ⁴¹宮本又次『五代友厚伝』（有斐閣 1980）。
- ⁴²梅溪昇『高杉晋作』（吉川弘文館 2002）、宮本前掲『五代友厚伝』（有斐閣

1980)。

⁴³宮本前掲書。

⁴⁴久保文克『近代製糖業の経営史的研究』(文真堂 2016)。

⁴⁵雑誌『講談愛国婦人』『支部報』(58号 p153)。三井の明治大正期の幹部については武内成『明治期三井と慶応義塾卒業生』(文真堂 1995)の検証があり、益田孝、太郎の親子をはじめとしてこの支部報に掲載された多くの幹部の名を確認することができる。

⁴⁶西郷隆盛の近年の研究史については家近良樹『西郷隆盛 人を相手とせず 天を相手とせよ』(ミネルヴァ書房 2017)。

⁴⁷越智治雄「福地桜痴試論」『近代文学成り立期の研究』(岩波書店 1984 p99-100)。

⁴⁸菅原健史『明治の平和主義小説』(名古屋大学大学院文学研究科博士学位論文 第6章 2012・9)。

⁴⁹この点については、前掲「戦う女・演説=議論する女・慈愛の女」一雑誌『台湾愛国婦人』の「講談」作品を読む―配布資料参照。

⁵⁰幕長戦争の史実と『講談 愛国婦人』の記述との対応については広島大学名誉教授三宅紹宣先生にご教示をいただいた。むろん論述の責はあくまでも柳瀬にある。講談『愛国婦人』での幕長戦争の記述に関しては、史実と異なる点がいくつか見受けられるものの、全体としてはこの段階で見ることのできる様々な資料や証言をもとにして記述をしていると考えられるだろう。なお三宅紹宣『幕長戦争』(吉川弘文館 2013)も参照。

⁵¹一坂太郎『長州奇兵隊』(中公新書 2002 p162)。

⁵²高見雄一編『大阪汎愛扶植会』(1909)、小野修三「社会事業家加島敏郎と朝鮮―大阪汎愛扶植会から朝鮮扶植農園へ―」(『三田商学研究』(慶應義塾大学商学会 48巻6号 2006)。

⁵³前掲高見雄一編『大阪汎愛扶植会』。

⁵⁴『社会事業界の先覚を語る : 加島翁古稀記念誌』(1938)。小野修三「明治・大正期における岡山孤児院と大阪汎愛扶植会」(『慶應義塾大学商学部創立五十周年記念日吉論文集』 2007)。

⁵⁵長沼友兄『高瀬真卿と東京感化院』(淑徳大学長谷川仏教文化研究所 2011)。また長沼友兄編集『高瀬真卿日記』(淑徳大学アーカイブズ 2012)。

⁵⁶この「慈愛」と昭憲皇太后との関係については、前掲「戦う女・演説=議論する女・慈愛の女」一雑誌『台湾愛国婦人』の「講談」作品を読む―配布資料参照。ジェンダーと「愛国」についてはこの研究で考察をしている。

⁵⁷柳田泉『政治小説研究 上巻』(春秋社 1967)での高瀬真卿に関する著述

では感化院に携わってからの高瀬は考慮の外に置かれているが、よりトータルなかたちで彼ら幕末維新期の政治小説家の足跡をたどる必要があるだろう。⁵⁸この用語の選択は中村平『植民暴力の記憶と日本人—台湾高地先住民と脱植民の運動—』（大阪大学出版会 2018）の指摘に負う。「台湾高地先住民」の呼称をめぐる背景については中村平同書第1章を参照。

⁵⁹下岡友加「植民者は被植民者の文化を語りうるか？—『台湾愛国婦人』掲載・西岡英夫（英塘翠）「生蕃お伽噺」をめぐる考察—」（『台湾日本語文学報』45 2019・6）。

⁶⁰乙重昌文「太郎冠者＝益田太郎と「理蕃事業」—喜劇『生蕃襲来』の成立事情—」（『国文学攷』240号 平成30年12月）。『生蕃襲来』について言及した研究としては上田正行「生蕃」と表象された台湾—通俗小説・大衆小説・冒険小説の位相—（高山実佐研究代表『『台湾愛国婦人』の研究—本文篇・研究篇』 国学院大学 2015）があるが、上田論文には同作品が益田太郎冠者作であることへの言及はない。

⁶¹山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』（風響社 2009 p90）。

⁶²乙重前掲論文 p20。乙重は当時の『朝日新聞』『読売新聞』の演芸欄の記事を引用しているが、『都新聞』にも『生蕃襲来』に関する記事がある。『生蕃襲来』の「序」の謝辞にも名前が出てくる内田民政長官と大津蕃務長官が帝劇の舞台稽古を見物したことが『都新聞』市内版大正2年5月1日の記事にあり、5月3日には伊原青々園による「五月の帝国劇場」の劇評として『生蕃襲来』への評が掲載され、5月7日の記事には活動写真に撮影したいとの申し出に対し「台湾協会より写真は公共団体用として使用するを条件とし多分撮影を諾すべし」とのコメントが載り、5月9日の記事にはこれも謝辞に名前が載っていた「補里製糖株式会社の重役小塚貞義」が劇中に出てくる「水牛」の動作を指導し「水牛の先生」と呼ばれたことが書かれている。これらの記述から総督府をはじめ様々な人間がこの劇をバックアップしていたことが窺われる。

⁶³『地球の上に朝がくる 川田晴久読本』（中央公論新社 2003）での瀬川昌久「川田義雄の半生期」の記述による（p58）。

⁶⁴井村君江「大正期の舞台—松井須磨子から浅草へ」『「サロメ」の変容（新書館 1990）』。

⁶⁵井村前掲書 p294。

⁶⁶高野正雄『喜劇の殿様 益田太郎冠者伝』（角川書店 2002）には、益田が大正2年2月に台湾製糖の五人の部下とともに台湾に視察に出かけ、帰国後の邸宅での園遊会で芸者劇として「生蕃襲来」を上演し、その際、台湾から持ち帰った現地の衣装を芸者に着せ、バショウを使った「生蕃小屋」を建て

たことが記されている(p84)。なお、伊藤重郎編『台湾製糖株式会社史』(1939)にはこの視察は記載されていない。

67『台湾日日新報』大正2年2月15日、2月19日消息欄。

68中村平『植民暴力の記憶と日本人—台湾高地先住民と脱植民の運動—』(大阪大学出版会 2018)。なおこの部分の論述の責はあくまでも柳瀬にある。

69中村平前掲書 p104—112。

70益田太郎冠者『生蕃襲来』(『台湾愛国婦人』55号 大正2年6月号) 二幕目其の一 p24。

71この雑誌のプロパガンダ性については前掲下岡友加「雑誌『台湾愛国婦人』の性格—プロパガンダ、そして近代文学発生の場として—」。前掲乙重論文にも「「理蕃五箇年事業」を「内地」の大衆に知らしめるプロパガンダ劇の役を担わされていた」(p16)との指摘がある。なお、近年の文学とプロパガンダについての研究成果として五味淵典嗣『プロパガンダの文学 日中戦争下の表現者たち』(株式会社共和国 2018)、植民地とサブカルチャーの関わりを論じたものとして大塚英志『大政翼賛会のメディアミックス 「翼賛一家」と参加するファシズム』(平凡社 2018)。こうした昭和期のプロパガンダ研究に先行するものとして本稿の研究を位置づけることができるだろう。

72久保文克『植民地企業経営史論—「準国策会社」の実証的研究—』(日本経済評論社 1997)。

73久保文克『近代製糖業の経営史的研究』(文真堂 2016)。

74台湾の植民地主義における「愛国」「他者」の問題系については中村勝『「愛国」と「他者」—台湾高地先住民の歴史人類学Ⅱ—』(株式会社ヨベル 2006)。中村勝の仕事の再検証として前掲『植民暴力の記憶と日本人』をはじめとする一連の中村平の論考を参照。なお、中村勝の本で検証されている井上伊之助が大正2年2月(つまり益田太郎冠者と同じ時期)に大嵯岨經由角板山に赴いている点は興味深い。中村勝『「愛国」と「他者」井上伊之助年譜』p45。